

帰国生 入試情報

帰国生の中学・高校選びQ & A

～受験生と保護者の疑問にお答えします。

米日教育交流協議会・代表 丹羽 筆人

帰国予定の方にとっては、お子さんの帰国後の学校選びは大きな課題の一つです。帰国後の住所や帰国時期(学年や学期)によって受け入れ先が異なりますし、滞米年数や来米時期によってお子さんの日本語力が異なるので、それに合わせた学校選びや受験対策が必要になります。ここでは、帰国後の学校選びの際によく聞かれる質問について回答します。

Q. 帰国するタイミングはいつがよいのでしょうか。

A. この質問については、小学生、中学生、高校生の場合について、順に説明します。

《小学生の場合》

住所地の公立校であれば、いつでも編入できます。しかし、帰国生を受け入れたことのない学校の場合、面倒見がよくなかったり、異質な子どもとして見られたりすることもあるかもしれません。事前に住所地の学校の様子を調べるのが大切です。

一方で、帰国生がある程度いる受け入れ校を選ぼうとすると、福島、茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川、富山、静岡、愛知、三重、京都、大阪、兵庫、奈良、岡山、徳島、広島、徳島、福岡、沖縄にある90校ほどのみとなります。受け入れ校の内、公立校は18校で、それ以外の国私立校では編入時期が年2～3回(4月、9月、1月)と限られている学校も目立ちます。したがって、住所地や帰国時期が限定されてしまいます。

中学校への進学は、国内生は90%以上が公立中ですが、帰国生の場合は35%ほどが私立や国立の中学校を選択します。ただし、国私立校への進学が目立つのは東京、神奈川などの大都市のみです。国私立校では入学試験が課され、帰国生入試の場合は、国語、算数の2教科が多く、英語を課す学校もあります。英語以外のテストは、国内生と同じ問題が課されることも多いので国内生と同様な受験対策が必要です。

このため、父親を残し小学4年生や5年生の時期に帰国し、日本で早めに受験対策をする方も目立ちます。帰国生中学入試の出願資格は在外年数が1～2年以上で、帰国後1～2年以内が多く、中には在外年数と帰国後の年数が同数、つまり、在外年数が3年ならば、帰国後3年でも受験できる学校や、帰国後の年数は無制限という学校もあるからです。小学6年生まで海外に在住し、中学受験に臨むという受験生は、最近では少なくなりました。ライバルのことを考えると早めに帰国したほうがよさそうです。

ただし、作文や面接のみという負担の軽い入試を行う学校もあります。中高一貫校では、帰国生の英語力や異文化体験を重視して受け入れ、6年間かけてじっくり育てようという方針の学校もあります。決して無理して受験対策をする必要はないといえます。

《中学生の場合》

住所地の公立中学校には必ず編入できます。しかし、帰国生を受け入れたことのない学校の場合、面倒見がよくなかったり、異質な生徒として見られたりすることもあるかもしれません。事前に住所地の学校の様子を調べるのが大切です。

一方、私立中学校では、編入時期が4月、9月、1月というように決まっている学校があります。編入時期に合わせて帰国しないと、編入までにどの学校にも所属しない

ブランクの時期が生じます。もちろん、随時受け入れてくれる学校もあります。また、中高一貫校の場合は中3での編入でも受け入れは概ね柔軟ですが、そうでない場合もあります。中高一貫校では高校の履修内容を先取り学習している学校もあり、中3の編入試験で高1相当レベルの問題が課されることもあります。編入試験がどのような範囲から出題されるのかを確認することも必要です。

高校への進学には、必ず入学試験が必要です。私立校では、国語、数学、英語の3教科という学校もありますが、多くは理科や社会も加えた5教科型です。帰国生入試では、国語、数学、英語の3教科という学校が主流ですが、自宅の近くに帰国生入試実施校がなければ、国内生と同様に5教科型での受験が必要です。帰国生入試実施校を受験できない場合には、できるだけ早く帰国したほうがよいといえます。

また、現地校の9年生を修了していないと入学が認められない高校があります。その場合、帰国して中学校を卒業する必要があります。中学への編入は、国私立校では中3からでは難しく、中1～2の間のみとなります。公立校はいつでもよいのですが、中3の夏休み前までの編入をお勧めします。夏休み明け以降の編入は、学級担任の先生から敬遠されることもあります。受け持ちの生徒の高校進学のための書類作成や指導に追われているためです。

《高校生の場合》

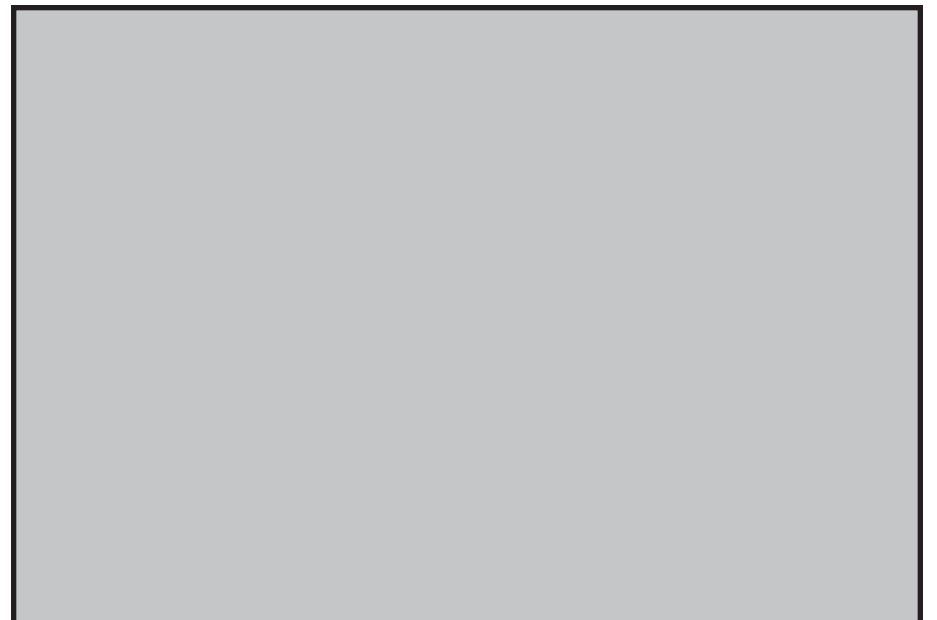
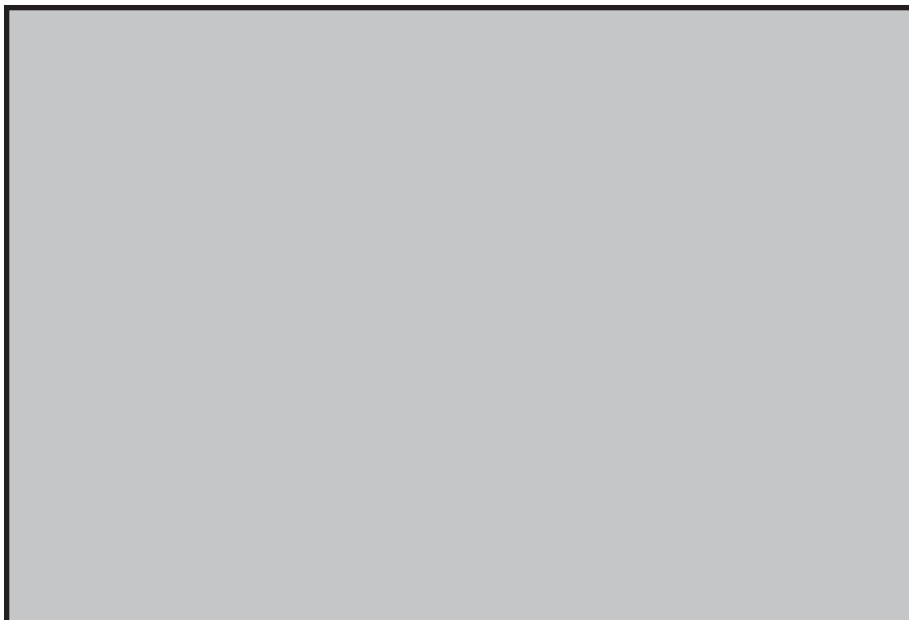
帰国生の編入を実施する高校は決して多くはなく、定員に余裕がある場合のみというのが一般的です。また、編入時期も4月、9月、1月などに限る高校も目立ちます。また、編入できる学年も2年生までという高校が多く、3年生に編入できる高校はごくわずかです。

編入のためには入試があります。入試は編入時期の2か月ほど前に実施する学校が多いので、3か月ほど前には受験校を決定し、出願せねばなりません。急に帰国が決まり、帰国までの期間が短い場合には、入試や出願の時期を逸してしまうこともあります。

編入試験の入試科目は、高校によって異なりますが、英語、数学、国語の3教科が課されることが多いです。国語には古文や漢文も含まれ、理科(物理、化学、生物など)や地歴公民(日本史・世界史・政治経済など)が課されることもあります。出題範囲は編入する高校の進度によって異なります。編入後に授業についていけるかどうかを確認するために、直近に実施された定期テストが入試問題として使われることもあります。数学は高校によっては進度が異なり、例えば、1年生でも数学Ⅱのように1学年上の履修科目が課される場合もあります。

このように高校生が帰国する場合には、帰国予定時期の志望校の編入実施の有無、学年、入試日や出願期間、入試科目や出題範囲などを早めに確認する必要があります。志望校が帰国のタイミングで編入を行わないことも踏まえ、多めに選定しておきましょう。

なお、日本の高校では、履修したすべての科目の単位を取得しないと卒業できません。また、卒業後、ほとんどの国公立大と早稲田大、慶應義塾大などは、帰国生入試で受験できません。また、高校1年生で編入した場合には、帰国生入試で受験できる大学が少なくなります。大学受験でも国内生と同様な対策が必要になります。大学入試において帰国生としてのメリットを得たい場合には、現地の高校を卒業する必要があります。



Q. 帰国生入試のための対策を教えてください。

A. できるだけ早く受験予定校を決定し、各校の入試科目や出題傾向に合わせた学習をすることが大切です。帰国生中学入試では、国語と算数の2科目を課す学校が目立ちますが、理科や社会を加えた4科目を課す学校や英語、作文を課す学校もあります。また、帰国生高校入試では、国語、数学、英語の3科目を課す学校が多いのですが、理科や社会を加えた5科目を課す学校や作文または小論文を課す学校もあります。また、ほとんどの学校で面接を課します。

各校の入試科目や出題傾向についての情報収集は、受験情報誌にも掲載されていますが、入試本番の1～2月は、新聞社や受験業界などのウェブサイトでも多数の受験情報が掲載されます。試験本番での心構え、今年の入試問題や解答・解説、出題傾向分析、そして受験対策や学校情報などを把握するにはもってこいです。

ここで掲載される入試問題は帰国生入試専用問題ではありませんが、帰国生入試で国内生の一般入試と同一問題を課す学校を受験する場合には、ダウンロードしてチャレンジするとよいでしょう。解答や配点があれば答え合わせや点数化もできます。合格最低点が公表されていれば、現時点での合格の可能性を図ることもできます。公表されていない場合でも、7割前後正解できれば合格の可能性があると考えてよいでしょう。例外はありますが、入試問題は合格ラインが3分の2くらいとなるように作成されているからです。

帰国生中学入試で一般入試と同一試験問題を課す学校は、一般入試の解禁日の2月1日以降に入試を行う学校が目立ちます。帰国生高校入試では一般入試と同一問題を課す学校が大多数です。入試において安定した得点力を身につけるためには、問題演習を繰り返すことが大切です。また、時間内にスピーディーに問題を解く練習を積むことも必要です。模擬試験はぜひ受験したいですね。海外では受験機会が少ないですが、一時帰国の際に受験するのもよいでしょう。

Q. 帰国生の公立高校入試は国内生とどう違うのですか。

A. 公立高校では、調査書(中学校の成績など)と学力検査(国語、数学、理科、社会、英語)を総合的に評価して入学者が選抜されます。ただし、帰国生への対応は都道府県によって様々です。

まず、大多数の都道府県が帰国生に対して特別な配慮をするのに対し、新潟、香川、徳島、愛媛ではそれを明示していません。また、次の17の都道府県(北海道、福島、千葉、東京、神奈川、富山、石川、静岡、愛知、三重、京都、大阪、兵庫、奈良、岡山、福岡、大分)では帰国生受け入れ高校を特定校に定めているので、それら以外の高校では特別な配慮はないといえます。その他の26県ではすべての高校において特別な配慮がされることになっています。ただし、入試での負担軽減がほとんど

で、入学後のサポートはあまり期待できません。全国で帰国生が10人以上いる公立高校は30校ほどですし、ほとんどの高校では帰国生がいないとか在籍したことがないというのが実態だからです。一方、帰国生在籍数の多い高校では、ある程度のサポートは期待できそうです。ちなみに帰国生在籍数が20人以上の公立高校は次の通りです。東京都立:国際、三田、竹早、神奈川県立:横浜国際、神奈川総合、鶴嶺、新城、横浜市立:東、静岡県立:浜松北、愛知県立:千種、豊田西、刈谷北、大阪府立:住吉、千里、神戸市立:葺合

次に、入試科目に目を向けると5科目が19道県、3科目が18都府県、2科目が2府県で、それ以外が4県です。3科目の都府県の多くでは国語、数学、英語が課されますが、長野は数学、理科、英語の3科目ですし、山梨と熊本では5科目のうち3科目を選択できます。学力検査を課さない4県の内、兵庫は適性検査と小論文、岡山は調査書と面接、福島、長崎、鹿児島は作文のみです。なお、栃木、群馬、神奈川、長野、岐阜、三重、大阪、奈良、広島、福岡、熊本では学力検査の他に作文または小論文が課されます。また、札幌市立の4校は英語のみ、都立国際は英語の作文のみで受験できます。

このように公立高校の帰国生入試は都道府県によって様々ですし、仕組みが変わることも多いので、各々の教育委員会にて情報を収集し、対策を立てることをお勧めします。



執筆者のプロフィール

河合塾で十数年間にわたり、大学入試データ分析、大学情報の収集・提供、大学入試情報誌「栄冠めざして」などの編集に携わるとともに、大学受験科クラス担任として多くの塾生を大学合格に導いた。また、全国の高等学校での進学講演も多数行った。一方、米国・英国大学進学や海外サマーセミナーなどの国際教育事業も担当。米国移住後は、CA、NJ、NY、MI州の補習校・学習塾講師を務め、2006年に「米日教育交流協議会(UJEEC)」を設立し、日本での日本語・日本文化体験学習プログラム「サマー・キャンプ in ぎふ」など、国際的な交流活動を実践。また、帰国生入試や帰国後の学校選びのアドバイスも行っており、北米各地で進学講演も行っている。河合塾海外帰国生コース北米事務所アドバイザー、文京学院大学女子中学校・高等学校北米事務所アドバイザー、名古屋国際中学校・高等学校アドミッションオフィサー北米地域担当、名古屋商科大学アドミッションオフィサー北米地域担当、デトロイトりんご会補習授業校講師(教務主任兼進路指導担当)

◆米日教育交流協議会(UJEEC) Website:www.ujeeec.org

帰国生入試情報のバックナンバーを

Japan News Club 公式サイトでご覧いただくことができます。

www.JapanNewsClub.com

